

倣に外ならなかつたのと並行する現象でありまして、もとより當然のことでもあります。ただ、問題はかように輸入され模倣されたものが、いつまでも同じ調子に模倣の態度を続けるか、もしくははこの模倣したものを土臺として、独自の發達を遂げるか否かの點にあるのでありまして、それによつて民族の文化性が定まる次第であります。

さて、かかる調子で飛鳥時代百餘年の間、隋・唐との接觸によつてわが國に流入した大陸文化は、初期に於ては輸入の形その儘に、社會の上層僅少の範圍に局限されて行われたのが、時の経過につれてその上に漸次國人の好尚情操が加えられ、大陸文化を基調として或る程度に独自の新たなる形を發達させ、その行われる範圍も遙に擴大されるに至つたのが奈良朝の文化相であります。いうまでもなく奈良朝においても、唐の文化の導入はますます盛んになりました。元正天皇の養老元年（七一七年）から、光仁天皇の寶龜八年（七七七年）に至る約六十年間に、四回に及んで遣唐使が出されております。この遣唐使の派遣に當つては、大概五、六百人の同行が隨伴したと思われ、その中に多數の留學生も加わつて渡唐したのであります。これらの留學生達は、入唐して間もなく歸るものは少く、大概數年、長いものは二十年、遂には歸らなかつた人もあります。例えば、阿部仲麻呂は彼地で亡くなり、吉備眞備とか玄昉などは、皆十數年ないしは二十年餘りも留つておつたのであります。これ等の留學生はいずれも、唐のすぐれた文化を身につけて歸り、またその書籍や美術工藝品なども數多く將來いたしましたので、この筋からだけでも、奈良期における唐の文化の輸入の勢は、飛鳥時代よりも一段と盛んであつた次第であります。特にその頃の唐の文化は、唐一代の中でも最もすぐれた開元・天寶時代のそれで、誠に絢爛の美を極めたものでありましたが、それがそのまま日本にもたらされたのであります。ところで、奈良朝時代においては、わが國の文化